様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月　１４日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530505
研究課題名（和文）　身体観と身体管理に関する質的研究

研究課題名（英文）　A Qualitative Study on Views of the Body and its Management in Contemporary Japan

研究代表者
草柳　千早（ KUSAYANAGI　CHIHAYA ）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：40245361

研究成果の概要（和文）：
本研究は､現代日本における人びとの身体観､身体との向き合い方を探究することを目的とし、現代人の身体と身体管理に関する「知識」「常識」のあり方を、一般に流通する健康に関する雑誌や書籍等にみられる言説および身体管理に関心を持つ人びとへのインタビューからとりだした。その結果、２つの対照的な身体観として、「客体としての身体」観と「主体としての身体」観を析出した。その上で、特に後者の身体観とその含意について、現代社会のあり方、諸問題を問いなおしていく１契機として議論した。

研究成果の概要（英文）：
This research explores the different ways people perceive their bodies and what actions they take to care for themselves in contemporary Japan. Everyday knowledge regarding the body and its care is analyzed by examining health-related books and magazines. Interviews with persons interested in the body and its care such as practitioners of Yoga are also included. It was found that there are two different views of the body: the body perceived as either a subject or an object. This research makes the argument and concludes that viewing our body as a subject could be a starting point to discuss and work towards solutions to the various problems in contemporary society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学

キーワード：

身体　身体管理　身体観　健康 主観的意味　知識　自己　相互作用

１．研究開始当初の背景

（１）社会的背景　現代社会では、電子メディアによるコミュニケーションの飛躍的発達、生活全般のＩＴ化など、日常生活において身体が必ずしも中心化・前景化されない活動の比重がかつてなく高まっている。同時に、高齢社会・成熟社会の到来を背景に、健康志向、美容、食の安全など、身体への関心が広がっている。両者は一見異なる位相にあるようにみえるが、現代人が身体をめぐって日常的に置かれている状況を形成しており、現代人の身体観と身体への対し方に影響を与えている。また逆にこうした身体観がわれわれの身体をめぐる状況にを反映されている。身体は、諸個人にとって、生および社会生活への参加にとって根本的な次元であり、人びとがどのような身体観を持ちいかに自己の身体を扱い管理しているかは、社会のあり方そのものと深く関わっている。そこで、本研究では現代人の身体観、身体との向き合い方に注目し、これを探究することを通して、現代社会のあり方を批判的に検討したいと考えた。

（２）理論的背景　　社会学において身体への関心が 1980-90 年代頃より高まり、「身体の社会学」と呼ばれる研究が隆盛してきた。本研究者は対面的相互作用を研究したＥ．ゴフマンの身体論に学び、相互作用のメディアとして自他のまなざしの下で管理される対象として身体に注目してきた。本研究はこれを踏まえたうえで、身体を、コミュニケーションのメディアとしてだけでなく、私たちの生の実感に直接結びつき、その生を可能にしているものとして捉え、そうした身体との私たちの向き合い方を考察する。

２．研究の目的

本研究は、 現代日本における人びとの身体観、身体との向き合い方あるいは身体への対し方を、人びとの主観的意味に即して捉え、その社会的意味を考察していく。そこから、現代社会における身体の置かれた状況を人びとのリアリティの側から批判的に検討していくことを目指す。 身体観、身体への向き合い方・対し方は、それ自体非常に幅広い問題領域をなすが、この研究では、そのうち身体の外見・表層部分（社会的コミュニケーションの位相）、身体の内面（健康管理など、社会生活への参加の基盤的位相）を共に視野に入れたうえで、とりわけ後者の位相に焦点を合わせ、現代人の身体管理、健康・体調管理のあり方を探究する。そこから見えてくる現代社会のあり方を批判的に検討する。

３．研究の方法

本研究は次の２つのアプローチを通して課題に取り組むこととした。

(1)身体に関する日常的知識へのアプローチ。人びとの身体観・意識と活動に作用し、またそれを反映する日常的知識として、現代生活

に広く流通する身体・健康関連情報に注目し、身体に関していかなる「知識」が流通し、そこから現代人の身体に関するいかなる「常識」や「考え」を取り出すことができるかを、主として言説の質的分析によって浮かび上がらせる。

(2)身体への諸個人の向き合い方・対し方、身体に対する意識、身体管理に関する実際的な活動へのアプローチ。自己の身体管理にかかわり特に何らかの実践を行っている人びとを対象に、人びとが実際に行っていること、その活動への当事者の意味づけ、身体のとらえ方を探る。

研究方法は、(1)は言説分析、(2)は質的・半構造化インタビューとする。いずれも、データの質的な分析を主眼とする。この方法的選択のここでの要諦は、かつてH．ブルーマー（Blumer 1969）（出典下記）が強調したように、対象者にとっての主観的意味を明らかにしていくことを目指すことであり、またその意味が対象者の社会生活の中で他者（及び接する情報）との相互作用を通して解釈され形成されるという観点を採ることにある。

Blumer, H., 1969, Symbolic Interactionism：Perspective and Method, University of California Press. 後藤将之訳，『シンボリック相互作用論---パースペクティヴと方法』勁草書房，1991.

４．研究成果

（１）研究の主な成果

私たちは日々自らの身体を多様な情報に接しながら管理している。ブルーマー（Blumer 1969）は、シンボリック相互作用論の前提として以下の３つをあげる。第一に、人間は意味に基づいて行為する。第二に、意味は社会的相互作用において形成される。第三に、意味は人間によって解釈される。この前提を踏まえるならば、私たちは、自分の身体やその状態についても、日常的に利用可能なさまざまな知識を用い、周囲の人びとと相互作用しながら、さまざまな解釈、意味づけを行っている。ここでは、身体と身体管理に関する日常的な知識と語りへの接近によって、身体への２つの対照的なアプローチ（意味づけとその意味に基づく向き合い方・対し方）、身体観があることを見出した。それらをここでは便宜的に、「客体としての身体」観と「主体としての身体」観と呼ぶことにする。それぞれの概要を以下に示す。

・「客体としての身体」観：身体を、何らかの刺激を加えることによって望ましい状態に向けていくような客体として捉える。身体は、既存の知識を用いて働きかけ、求める結果ないし効果をあげる目的で操作、管理する対象である。 身体は、適切なインプットに対して適切に反応することが期待される、言わばメカニックな客体である。こうした身体は働きかけの対象として、その持ち主である主体に対して従属的である。

こうした身体観は、健康雑誌・健康関連書籍（実用書）のなかにきわめてしばしば見出すことができる。これらの媒体において、身体管理のために提供される知識の性格はさまざまである。例えば、最新の科学的・医学的知識とされているもの、東洋医学や民間療法など、西洋医学的な知識の体系に対して

「オルタナティブ」な知識とされているもの、それらを合わせ「ホリスティック」と呼ばれているようなもの、またこれらいずれに対してもさらに「オルタナティブ」というべきか、超常現象的な作用に関する知識など、実にさまざまである。しかしながらこれらはいずれも、身体に対して特定の結果を求めて既存の一般的な知識に基づいて働きかける、という点で、同一の形式を共有している。

こうして提供される身体管理に関する知識は、その内容を見れば多様であるが、いくつかの共通の特徴を持つ。第一に、それらは手軽に試行できるものである。 第二に、それらの知識は、それぞれ「医学」「科学」など体系性をもったパラダイムを背景としつつも、提供されている単体としては断片的なものである。第三に、こうした知識は、誰にでも等し並みに適用可能という意味で一般性と汎用性を持っている。以上の３つの特徴は、それ自体として身体観を反映していると同時に、その知識に触れる人びとの身体観に影響を与えている。手軽に実行可能な方法の提示とその断片的性格は、私たちに、身体とは、大きな問題を抱えているのでなければ日頃のちょっとした実践によって維持したりケアしたりできるものである、ということを示す。また、身体についての知識は、専門家が占有する体系的、専門的な知識と、そのいわば普及版である、その都度の断片的な知識に大きく二分されており、一般の者は、後者、すなわち専門家がその体系的知識のなかからその時々のニーズに合わせて教示する知識の断片、実際的な一部分をその都度利用する。さらに知識が一般的で汎用的な形で提供されていることも、一方で、身体観の反映であると同時に、私たちの身体観に大きな影響を与えているものと思われる。それは、身体は誰の身体であっても基本的に「同じ」である、という身体観である。一方で、私たち一人一人は唯一無二の存在である。身体はそれぞれ唯一無二であり、年齢や性別、その特徴、履歴、生活習慣、すべて異なっている、と言える。しかし、ここで暗黙の前提となっているのは、その「差異」や「固有性」よりも、「同一性」である。同一性のイデオロギーと言ってもよい。個別にいかに異なる生活を営み、またいかに異なる身体的特徴や履歴を持っていたとしても、人の身体は基本的に同じである、ということが、こうした知識の提供と受容の前提にあり、またその前提はこれらの知識を通して暗黙の内に確認され強化さ、常識化している。

・「主体としての身体」観： 身体をそれ自体として私たちに何かを語りかけてくる主体として捉えるようなアプローチである。個々の身体はそれ独自の論理で私たちに何かを主張していると考え、その主張に人が従うことで自ずと身体にとってよい状態が実現すると考える。身体がその持ち主に対して働きかけてくる、その意味で身体の方が主、それに応える側である自己の方が従属的である。

この身体観は、主にインタビューにおいて、とりわけヨーガなど、非西洋的な身体エクササイズを日頃実践している対象者の語りに見出された。健康雑誌や健康関連図書に見ら

れる場合も、往々にして非「西洋医学」的な文脈で語られているように思われる。それらは、「自分の身体の声を聞く」「自分の身体と向き合う」「自分と対話する」「自分の身体を見つめる」「身体からのサインを見過ごさない、放っておかない」「本当に大切なことは、身体が知っている」といった言葉として語られる。いずれにおいても、主は身体であり、人は自身の身体が知っていること、教えてくれることに耳を傾け、従う。

では、自分の身体の声をきく、個人にそれ自身を伝えてくる身体とは、どのようなものか。これらの語りに共通する身体認識が見出される。大きくまとめれば、身体は、第一に、「自然」であり、第二に、「一人一人違う」ということであり、第三に、心と体とは繋がっている、ということである。これらの特徴は、「客体としての身体」観とほぼ対照を成している。身体は自然であり、自然には独自の力（自然治癒力）やリズム（バイオリズム）などがあり、心もまた身体の一部である。またそうした身体は一人一人違うものであるとして、個別性が強調される。身体の差異は、個人間のみならず、同じ個人であっても、季節、一日のサイクルなど時間や、場所などの空間、状況によっても認められる。こうした身体のとらえ方は「同一性」に軸をおく「客体としての身体」観ときわめて対照的と言える。

いずれの身体観も、健康管理が求められかつしばしば困難であるような現代社会において、いかに身体を良好な状態に維持管理するかという関心を共有する。しかしながら、両者は身体に対してほぼ対照的な見方をとっており、本研究では、特に「主体としての身体」観に、現代社会のあり方を批判的に問いなおす契機が含まれていると考え、その含意に焦点を当てる。「主体としての身体」観は、身体の声に従うことの重要性を強調するが、そのことは実際の社会生活において、各自が自分の「身体の声を聞」けていないという認識・評価の裏返しとも言える。そしてまた、この考えでは、人びとが自分の身体の声を聞けていないことが現代の社会生活上のさまざまな問題につながっているとされる。ではなぜ私たちは自分自身の身体の声を充分に聞くことができないのか。そしてそれはいかに問題なのであろうか。

まず、私たちが自分自身の身体の声を聞くことができていないのはどうしてなのか。語りの中から浮かび上がってくるのは、現代社会における情報の氾濫、仕事など社会生活の多忙さなど、私たちが生きることを余儀なくされている社会状況が、それを阻害しているということである。かつてG．ジンメルは「大都市と精神生活」（1903）において、都市的な生活における多様かつ高速な大量の情報の氾濫によって人びとの神経は高揚させられること、人びとは疲弊しひいては倦怠に陥っていくことを論じた。現代社会においても、私たちは「外から」の情報に対処することに追われ、自分自身の「内なる」声に耳を傾けることが難しくなっている。では、そのことはいかに問題なのであろうか。「主体としての身体」観によれば、身体の声とは、私たちが生きている自然・社会環境における身体の

それらに対するその時どきの反応である。身体はセンサーのようなものであり、さまざまな問題を感じとり反応する。そこで、身体の声を聞くことは、問題に気づくことであり、また対処することであり、その声を聞けないということは、問題の中にありながらそれに気づくことができない、それに対処することができない、ということになる。また、こうした「主体としての身体」観に含意されている、身体・自然観、心身一元論、一人一人の個別性およびそのときどきの固有性／差異の強調なども、それ自体として、現代社会のあり方を問いなおすひとつの契機となり得ると思われる。

（２）得られた成果の国内外における位置づけ

本研究は、大きくは身体の社会学のなかに位置づけられるが、既存の研究が、医療、健康、美容、スポーツなど、身体をめぐる活動の種類によってしばしば特徴付けられるのに対して、本研究では、当事者にとっての身体とその管理という問題設定から、それらの活動をむしろ横断的に捉え、その基底にある身体観に着目している。当事者の主観的観点に即して、身体との関わりと捉えようとした点では、シンボリック相互作用論から構成主義へと展開する方法的視点を採っており、身体への構成論的なアプローチということもできる。さらに、本研究で見出した「主体としての身体」観は、社会問題の構成主義が確立したクレイム申し立て研究に対して、その言語中心主義的な傾向を越え、「身体が語る問題」、「問題を語る身体」を浮かび上がらせる。さらに、この身体観を現代人の生活の中から析出しその現代的含意を考察していくことは、近代的科学的な知識とそれが常識化した私たちの日常生活、社会を問いなおす視点を新たに模索することにつながると思われる。

（３）今後の展望

本研究では、当初の仮説として、現代の身体に関する日常的知識は、パラダイムの異なるさまざまな知識のブリコラージュである、と考えていたが、結果的に、２つの対照的な身体観を見出すこととなった。とりわけ、「主体としての身体」観に、現代社会のあり方を問いなおしていく契機を見出した。そこで、今後は、「主体としての身体」観およびその語りの語彙が、実際に現代社会における問題の構成に、いかなる資源として用いられているか、実際にいかなる問題が構成されているか、さらにそうした身体観に基づくさまざまな実際の社会的活動にはどのようなものがあるかを経験的に研究していくことが今後さらに探究すべき課題として明らかになった。

５．主な発表論文等［図書］（計１件）

①著者名：草柳千早（単著）、出版社：世界思想社、書名未定、刊行予定 2012 年度内総頁数未定（2012 年 5 月現在執筆中）

６．研究組織

(1)研究代表者

研究代表者　草柳　千早

早稲田大学　文学学術院、教授、

研究者番号：40245361